

1. 高岡湯話、高岡詩話についての概要

(1) 高岡湯話のこと

高岡湯話は、富田徳風によって文化四年（1807）に書かれている。富田徳風は、横町屋弥三右衛門と称し、（横町屋弥三右衛門といえば、高岡では、天野屋傳兵衛と越前屋甚右衛門の三家は、由緒町人御三家として町宿老を勤めた家柄である。守山町に住していた。）〔宿老御三家は、それぞれもとは武士の出で、服部家は美濃の出で利家に従って数々の合戦にも加わったといわれる。横町屋、越前屋は、朝倉氏に仕える武士であったが、その後、越前の府中（武生）以来、利長に従って越中にきて守山、富山、そして高岡に移り住んだといわれている。〕

八歳の初めに四書（大学、中庸、論語、孟子のことで、学問の入門として、この四書を学ぶのである。）を習い、二十歳にして京都に遊学し皆川淇園に就いて儒教を学び、伊勢へ行って国学を学んでいる。当時は、高岡で寺崎蛸洲とともに文化教養人の中心となって活躍した。

「高岡湯話」は富田徳風によってまとめられた。今から約200年前の文化四年（1807）以前の当時の善行者100人余りが記されるだけでなく、当時の人々の人情細やかな風俗・習慣はもとより町々の様子や歴史を伝える貴重な資料ともいえるものである。

(2) 高岡詩話のこと

高岡詩話は、「詩話」というように、江戸時代の高岡人を中心とする詩づくりの活動の詳細をまとめたものであるが、高岡の地理人情に係わる詩文として心の風景としての高岡を、ありありと伝えるだけでなく、町々の様子などが興味深く伝える貴重な資料ともいえるものである。

この「詩話」の著者は、津島北溪で、北溪は、津島玄逸の子で、通称は彦逸といい、幼い時からあらゆる点で才能に優れ、天保2年（1831）に19歳で江戸に遊学して増島蘭園の門に入り、留学三年、この間に、多くの名流と交わり、学業を修めている。また、天保4年（1833）には、京都に行き数カ月諸家の学説を聴き、さらに天保5年に、再び江戸で学び、天保10年まで約5か年間にわたって学んでいる。高岡に帰ってからが専ら医業に携わり、文久二年（1862）に五十歳で亡くなっている。

北溪が、この「高岡詩話」を書いたのは、安政五年（1858）頃からできあがったのが万延元年（1861）であろう。

この高岡詩話の原本は、前田家に保存されているが、それが前田家から津島家に写本で送られてき、津島家所蔵の写本をもとに転写されたものが高岡中央図書館にある「高岡詩話」である。津島家は、今は高岡より金沢に転居されている。

高岡図書館所蔵の毛筆の「高岡詩話」の巻末には、明治39年に書かれた阿波加頼氏の津島北溪を讃えた七言律詩が朱書きで書かれ、その筆跡は詩話全文の筆跡と一致するものであり、そのことでは阿波加頼氏の手による写本ということか。

或いは、木蘇岐山氏の加えた^{しおう}雌黄があるともいわれているので、木蘇氏の手によるものか。

読北溪先生高岡湯話謹題巻尾

道德文章海内名 高風誰不慕先生 有時琴酒歌招隱 餘澤芝蘭見育英
著述等身間富貴 箕裘傳世久安榮 遺編歴歴音容在 惹起卅年無限情

明治癸卯九月十四日

旧辱交晩生 阿波加 穎再拜 敬書

北溪先生ノ高岡詩話ヲ讀ミ謹ンデ巻尾ニ題ス。

道德文章^{かいだい}ガ海内ニ名ス、高風ニシテ誰モガ不慕ナラザル先生、有時ニ琴酒歌^{しょうおん}スルニ招穩ナリ、餘澤^{よたく}ノ芝蘭^{しらん}ニ育英ヲ見ル、著述ハ等身ニシテ間ニ富貴^{ふうき}アリ、箕裘^{ききゅう}ノ伝世ハ久シク安榮シ、遺編ノ歴歴^{おんよう}ニ音容^{じやっさ}アリ、惹起四十年、無限ノ情。

明治三十六年九月十四日

旧辱交晩生 阿波加穎再拜 敬書

北溪先生の高岡詩話を読んで謹んで巻の終わりに題す。

道德、文章が、天下に轟き、その気高い人柄ゆえに、誰からも慕われる先生。ある時には、琴を奏で、詩を作り、酒を飲んでも、自ずと穏やかさを招き、また、その残された香り高い先生から英才の教育をみることができる。著述されたものは身の丈に等しく、蘭の花のように富んだ貴さが漂っている。家業は、代々久しく安らかに栄え、書き残された書物には、ありありと面影が見える。亡くなって四十年、果てし無い思いが湧き起こってくる。古くから交わり、辱めた、拙生の阿波加 穎が、再拜して敬書する。

阿波加穎は、佐渡家の出身で父の実家の魚津の阿波加家の養子となり、医業を継いだのである。

(3) 服部南郭のこと

高岡湯話・高岡詩話によると、江戸中期以降の高岡の町民を中心とする生活の様々な様相が伝えられている。殊に高岡詩話では、例えば、服部南郭が登場するが、南郭は、江戸にでて荻生徂来の門人として~~菰園塾~~の筆頭門人の一人であった。荻生徂来といえ、1666～1728年の人であるから、18世紀の初頭頃、宝永・正徳・享保年間に、活躍した人である。その点からいえば、高岡の江戸時代の宝永頃、18世紀初頭から嘉永・安政頃、19世紀の中頃までの約150年間のことが記されているということである。

このように江戸中期以降の高岡を知ることのできる貴重な資料であるにもかかわらず部分的解説されてきたが、高岡詩話を本格的に解説する手だてが講じられないまま今日に至ったということである。このため貴重な歴史素材が把握されないまま今日に至っているものもある。

特に、今まで全く知られていなかったということでは、服部南郭のことである。

服部南郭について、京都大学教授の日野龍夫氏が、そのライフワークの研究成果を「服部南郭伝攷」という書にまとめて出版されている。それによると、南郭は、荻生徂来の高弟として江戸後期の文芸界を主導し、江戸時代最高の詩人であったと述べている。また、日野氏にいわせれば、南郭は、実に調べ甲斐のある人物で伝存する伝記資料が、諸方に散在しているものの量的には伊藤仁斎、本居宣長に次ぐとっていいくらい豊富で、調べれば調べるほど、何でも分かってくる手応えを感じずる業績をもった人物である。

服部家は、家祖の連久以来、越中高岡の町年寄を勤める家柄である。連久は、もと美濃郡上から出て天正年間に前田利家に仕えて度々の合戦に従軍し、慶長十年に利長に従って富山に移り、この時に町人となって天野屋三郎左衛門を名乗った。慶長十四年利長が高岡を開くと、また高岡に移り、ここに定住した。慶長十五年に服部連久は他の二名（横町屋弥三右衛門、越前屋甚右衛門）とともに町宿老に任じられ、元和六年に七名を加えて町年寄十人の制に改まった後も、高岡の由緒町人の三家として新年拜賀に金沢へ登城する家柄を誇った。二代目正知（南郭の祖父）の妻の妙円の養父の伊藤内膳重正は、高岡町奉行であり、四代目正武の時には、正徳元年に本陣を命じられ幕末に及んでいる。古城公園の存続に貢献した服部嘉十郎の祖先でもある。

服部家の二代目正知の六男に当たる南郭の父の彦左衛門元矩が、延宝初年（1673）頃、京都に移住した。

高岡詩話では、南郭の出生について、次のように記している。「実ニ我ガ邑ノ出ニシテ、世人あれ罕ニ知ル、今特ニ之レヲ表ニ出ス」といい、「南郭ノ襦袢きんぽニ在ル也、父母ニ挈シテいっ京師ニ至ル」とある。南郭の幼少の時に、父母に連れ立って京都へ行ったというのである。

ところが、日野氏によれば、南郭は、天和3年（1683）に、恐らく京都の中京区車屋町で父元矩と母吟子の二男として出生したとある。しかし、父の実家の高岡の天野屋は、北陸から京都へ移入される物資を扱う問屋であり、京都へ移住した天野屋の人々も、それらの物資を扱う問屋的な営みをしていたと考えられ、高岡との行き来もあったものと考えられる。現に元矩の兄の方盛は京都の車屋町に越中屋半六として八講布を扱う絹問屋を構えていた。元矩も高岡詩話によれば、「間散餘録」に北国屋という名で店を構えていたようである。なお、高岡湯話に、「越中屋半六という者も京都に住んでいる。南郭先生はこの末裔である」とあるが、高岡詩話では、「修三堂湯話（高岡湯話）に、元矩を半六というのは誤りである」と記している。このとおり、半六とは元矩の兄の方盛こと、越中屋半六のことである。だから南郭は越中屋半六の末裔ではない。

八講布といえば、当時、越中は全国有数の布の産地で八講布の名で知られていた。この八講布が、開町間もない頃の寛永12年（1635）に藩では、高岡に布御印押人を設置し、越中産の布をすべて高岡で検印をうけさせることで高岡商人を保護した。このことから恐らく服部家が布御印押人として問屋的な地位にあったものと思われる。宝永年間には

、12万疋の取り扱い高があったともいわれている。これらの布が京都に向けて運ばれていたものと思われる。

また、元矩の長男の元恵が一時大津に住していたが、大津は北陸から上方へ向かう物資の集散地であったことと関わってのことであろう。

父の元矩と母の吟子との結婚は延宝末年頃と考えられるが、母の吟子の父の山本春正という人は、蒔絵師並びに歌人としても世に聞こえる人物で水戸家御用の歌学者として歌名の高い人であった。このため春正は、公家の歌会にもしばしば出席し、また、水戸光圀の知遇をえて、江戸歌壇の指導者的地位に立つこともある名士であった。

この両家の婚姻には、両家の旦那寺が共通していたことが、その縁であろうとされている。高岡の服部家の菩提寺は、片原町の妙国寺であり、服部家の正知の九男の日顕が妙国寺の第五世に治まっている。その妙国寺の本山となるのが京都の鞍馬口にある妙覚寺である。京都に移住した服部家の人々は、そのことで妙覚寺の檀家となる。一方、山本家も妙覚寺の檀家である。こうしたことが両家を結ぶ縁となったものである。

なお、京都への移住については、元矩の兄の方盛も京都の中京区の車屋町に越中屋の店を構え、越中の八講布を扱う絹問屋であった。この方盛、元矩が共に和歌の心得があり、元矩の妻の吟子の父、山本春正の歌会に、方盛（知貞）、元矩（知恒）の名で幾度も和歌を詠んでいる。これには山本春正の次男の通春が、伊藤仁斎に学んで徳山毛利家に仕える儒学者で、父春正をめぐる人々の詩歌・和歌・連歌などを編年体収録した「文翰雑編」全二十冊に著述し、今も宮内庁書陵部に所蔵されている。

こうした文芸好みは祖父の正知にもあり、一生の大半を高岡の町年寄として過ごした正知が、連歌を嗜み、家督を二男の正則に譲り、還暦を過ぎて京都に移住し、方盛、元矩に混じって京都の文雅の仲間入りするのである。こうした文雅の血筋をうけた南郭である。

十三歳で父を亡くした南郭は、その翌年に十四歳で、歌と絵でもって身を立てるべく江戸にでる。その後、十七歳、あるいは十八歳で、柳沢吉保に見出されて仕えることになる。吉保といえば、将軍綱吉のお側用人から幕府老中をつとめ権勢をほしいままにしていた。その将軍綱吉の寵愛をえて家運隆盛に向かっていった柳沢吉保が、将軍綱吉の好学の期待に応える意味もあって学芸の学輩を盛んに召し抱えて将軍の期待に報いるべく取り組んでいた。それ故に、南郭も十七・八歳の若さで召し抱えられることとなったものである。南郭が、柳沢家の歌会の記録に名を連ねるようになったのは、元禄十五年正月が初見だとされている。

その吉保の元で、歌人として柳沢家の歌会などで、元孝の名で活躍し、多くの歌を残している。その時に、同じく仕えていた荻生徂来と知り合い、柳沢吉保が亡くなった後、柳沢家を退き、荻生徂来の門で漢詩人として一門を代表する人物として数々の著述に塾を代表して名を連ねることになる。その活躍ぶりを、日野氏にいわせれば、伊藤仁斎、本居宣長に次ぐくらいであるということである。

これほどの人物が、服部家と関わっていたことすら高岡の史的資料に記されることもな

く今日に至ったということである。もっと、南郭のことを知る必要がある。

そこで日野先生に高岡へ来ていただいて是非、市民教養セミナーあたりで服部南郭についてご講演をお願いしたいところですが、残念なことに先生が昨年亡くなられたということである。

2. 両書の現代語訳での経緯と思い

一昨年、高岡湯話の現代語訳を試みて、その結果、昨年、市の図書館から出版されましたが、この湯話が伝える文体は、全体が漢語調で、いざ訳するとなると容易なことではありませんでした。この湯話につづいて、今回の高岡詩話は、全五巻に加えて補遺の巻を入れて六巻となり、全文か漢文で書かれているので、それを仮名交じりの文語文に読み下し、さらに現代語訳をつけようというのだから途方もないことに踏み切ったわけです。それだけでなく、詩話というように、その内容となるものは、当時の高岡の文化教養人を中心とする漢詩が200数十首掲載されている。その詩を現代語訳するとなると、これまた大変な作業である。

こうした作業の中での一二の例を取り上げてみると、高岡湯話では、高辻屋小兵衛の子の安五郎の話のところで、「是れより先、五月雨袂をしばりける時、門外にイみたるに、郭公はるかに音信たりければ、『一声は親にも聞かせ時鳥』と詠じけるぞ。予、此の句を按ずるに、これは、造次にも親に於いて、顛沛にも唯親を思へる事しられて涙こぼれめ・・。」とある。この件で、イ、音信を、どう読んだらよいのか。「造次にも」以下を、どのような意味にとったらよいのか。「造次」とは、仮初めということであり、「顛沛」とは、つまずき転ぶことである。しかし、このままでは文意を捉えることにはならない。「造次」「顛沛」を挟んで文章の前後を通して何度も読み通してみる。そこから「造次」を、一時、片時の間とし、「顛沛」を、つまずき転ぶことから、転ぶのは、とっさのこととすれば、五月雨の降るなか、門外の佇んでいると、遠くから郭公の鳴く声が聞こえてきて、家で病に臥せている親のことを片時も忘れることもなく、とっさに「一声親にも聞かせ時鳥」と詠んだという母思いの安五郎の情が知られて涙がこぼれるところである。ということで、この件の現代語訳の文意が、ほぼまとまるのである。こうして一つの山を越えようと、それがまた、次への挑戦への弾みともなるわけである。

ところが、高岡詩話の漢文、詩文ともなると、毎日が山の尾根を縦走しているようなものである。特にこのような心境を抱いたのは、閑雲禪師の次の詩を読んで訳した時に、戯れではないが、つい、私の今の心境は、この詩のようなものだなあと、考えさせられました。その詩とは、

歩上中峰臨太湖 雲生脚下白模糊 須臾變幻沒蹤迹 笑看天然活畫画
歩上ハ中峰ニシテ太湖ヲ望ミ、雲生ニシテ脚下ニ白ク模糊トシ、須臾ク變幻トシテ蹤迹
ヲ沒シ、笑ミテ天然ノ活キタ畫画ヲ看ル。

琵琶湖を一望に収めることのできる適った峰の上を歩く。雲が足元にぼんやりと生々し

い。その雲が、しばしば足元を隠すかのように幻のように忽ち現れては忽ち、また、消える。まさに天然の生きた書画を見るようだと喜ぶ。

まさに、模糊とした雲の中を進むような心境であった。

勿論、私自身の読解力の未熟さから、誤読の恐れも十分に考えられるわけである。現に、幾つかの箇所読解に迷ったところもあり、それだけでなく、特に詩文の仮名交じりの読み下しにおいて力の及ばない点で、十分でないことも、敢えて承知の上で取り組んだというわけである。ただ、こうした貴重な資料を、何とか現代語訳を通じて広く市民の皆様へ伝えたいという思いで一連の作業をさせていただいたということでお許しを頂きたいと思う。

特に、漢詩の現代語訳ということでは、一例をあげると、服部南郭が、隠居するようになって、父の元矩の五十回忌ということだと思われるが、江戸から五十年ぶりに京都へ旅して帰り、その時に、次の詩を詠んでいる。

ただし、北溪が書き記すように、南郭は、元は我が町の出身で幼い時に両親に連れ立って京都に出て、その後、京都を故郷としたということである。その服部南郭が、その後、十四歳で江戸に出て学び、やがて荻生徂来の菰園塾の筆頭門人として、実是一代の山斗と仰がれる人物となるのである。

その南郭の次の詩、

五十年前出上京 今遊猶作客中情 別長何処尋桑梓 祚薄無家問弟兄
認得山川疑夢寐 想來多少自分明 共知流転人寰裡 愧似劉郎返赤城

きやくちゅう

そうしん

五十年前ニ出デテ上京シ、今モ遊ビ猶ヨ客中ノ情ヲ作ス、別レテ長ク何処、桑梓ヲ尋ヌル、
祚薄ニシテ家トテ無ク弟兄ヲ問フ、山川ヲ認得シテモ夢寐ト疑ウ、想來シテ多少ノ自
分ヲ明シ、流転ノ人寰裡ヲ共知スル、劉郎ノ赤城ニ返ルニ似ルヲ愧ル。

このような詩の場合、五字、七字を一句として、一字一字に意味が凝縮されて表現されている。この詩の場合でも、「尋桑梓」の三文字についても、単に、桑と梓を尋ねると訳しても、それで訳したことにはならない。前後の文字の並びを通じて、この詩の心の表現を訳者の方で、どのようにイメージするかが大事である。そのことから、この三文字を、いま、故郷に帰り、幼い日の記憶にある籬の傍の桑と梓の木を尋ねて父祖を思い返す縁とする。というように訳する。こうしてこの詩の全文訳は、

五十年前に故郷を出でて上京し、いまなお、旅にある思いから抜けきれずに旅人気分そのままである。別れて長くあちこちと、いま、故郷に帰り、幼い日の記憶にある籬の傍の桑と梓の木を尋ねて父祖を思い返す縁とする。幸せ薄く今は家とてなく、兄弟を問う。故郷の山川を見て納得しても、何もかもが寝床の中の夢かと疑う。これまでの来し方を回想し、多少なりとも自分を見つめて、これまでの流転のうちに人の世の裏まで知り尽くしてきたが、今は、放蕩者が、赤城に帰るに似る思いを恥じている。

津島北溪は、この詩を、どこから入手したのであろうか。恐らく「菰園雜録」、あるいは

は「南郭文集」あたりから入手したものと思われる。

こうした漢詩の訳で、例えば、「三五約來池上庵」とある。三五が、何を意味しているのか。前後を見ながら暫くおいておくと、ある日、ころっと解ける。三×五=十五、ああ、十五夜の満月の日だ、この日に池上庵に来ることを約束していたのだ。

「五風十雨九春酣」とは、五日に一度の風が吹き、十日に一度の雨が降る。天候が誠に順調だ。だから「九酣」だという。「九酣」の九は、何を意味するのか、漢詩の中に「九十日春光」というのがある。春の穏やかな景色は、九十日、つまり、春は九十日の三ヶ月だということである。そこでここでの「九」は、「九十日春光」の略で、天候が順調なので、春九十日を酒を飲んで楽しく過ごすということである。そうすることで次の句の「堪喜天公恩沢覃」に、繋げて文意が整ってくる。つまり天帝の深い恩沢に感謝し喜びに堪えず、春の九十日酒を飲んで楽しく喜ぶということである。

金衣公子が、驚だと気づくにも、少し時間がかかりました。こんなことで、一つ一つの謎が解けてゆくと、気の遠くなる作業の毎日だが、意欲が増してくるということである。

最も、こうした難字、難問に、ぶつかると、やっぱり駄目か、ということで、つい、投げ出したくなる。それも、二三日、前後に振りながら考えていると、これも、私の性分からいうと、頭の中から離れない。それが、ひょんなことで、パラッと、解ける。それが、また、やっている者だけに分かる醍醐味というか、継続する意欲にもなるということである。

3. 両書が、相補強しあう高岡の史実的な事柄

これから順次、今まで知られていなかった高岡についてお話してゆきますが、例えば、高岡湯話と高岡詩話とが、互いにその記述を通して、当時の高岡の史実を伝えている箇所が、幾つもある。

(1) 時報の鐘のこと

高岡湯話に、享和二年(1802)に、坂下町の鍋屋仁左衛門が、時鐘を鋳直す世話をしたと荒れ地同様の御林地に桐の木を植えて毎年自分で手入れもしたことで、奇特なことだと、時の町奉行の荒木又右衛門殿が藩の方へ伝えられて、金沢表よりご褒美に御扶持を頂戴することになったことが記されている。

ここで、御林地に桐の木を植えたことが、今に桐の木町の地名のルーツになっているということである。また、時鐘の鋳直しについては、高岡詩話に、さらに、詳細に具体的に記されている。

越中の高岡に新しく造る時報の鐘の銘並びに序については、京都の皆川淇園が謹んで撰録したものである。皆川淇園については、後程、触れることにして、そもそも時報の鐘を造る経緯については、今を逆上る天明二年(1782)に、当時の町奉行の寺島某〔寺島

五郎兵衛]が、町に時報の鐘がないことから、慈しむ町民の手によって造ることを藩庁に願ひ出て、既に許しを得ていたが、果たせないまま職を退くこととなつて、そのことが途絶えてしまった。その後、文化元年(1818)に、この年といえば、瑞龍寺の現在の山門が再建された年です。かつての荒木奉行の孫の荒木赫〔蔵人〕が、また、高岡にきて町奉行となり、同役の荒木直哉〔五左衛門〕と共に相談し、金屋町と木町の人々が、旧から宅地を賜るなどの恩顧をうけているので金属を溶かし込んで鐘を造ることを持ちかけた。二町の町民が喜んで賛成してくれた。そして間もなく鑄造に取りかかった。こうして鐘を鑄たのだが、できあがった鐘の音は、馬の嘶くようであった。

それで、坂下町に町人で綿を商いとす鍋屋仁左衛門という者がいた。元は、金屋町の一族から出た者で、心から憤り、その鐘を壊してしまい、奮って鐘造りに当たり、自ら役所に願ひ出て梅山に鐘を鑄造する冶場を設け、また、町民に錢を募り、再び鐘の鑄造を促した。こうして二度目にして遂に鐘が完成した。出来上がった鐘の質は、純にして完璧なもので、音は明るく豊かなものであった。役人たちは小躍りして喜び、町民たちは手を打って踊り喜んだ。これには、凡そ五千六百二十五斤の銅を用い、工人が延べ千百人、十一日をかけたという。

このように記された皆川淇園の記した銘と序の撰文が、今も鐘に彫り込まれて伝えられている。皆川淇園という人は、京都の儒学者で、当時、高岡の詩の結社の盟主と仰がれた寺崎 洲や高岡湯話の富田徳風が、京都の皆川淇園の門人であったことから、この二人の周旋で淇園に願ひして撰録してもらったものである。その銘文は、次の通りである。

良宰考思 善繼祖規 賢僚輔贊 到彼嘉謔 金木竭力 鑄建是攷

其功既就 惠同天地 一都衆庶 獲莫失時 茲勒厥績 徵之萬祀

りょうさい こうし そ き ぜんけい けんりょう ほんん ちひ かし きんもく つく
良宰ガ考思シ、祖規ヲ善繼シテ、賢僚ガ輔贊シ、到彼ニ嘉謔シテ、金木ノカヲ竭シ、
し ちゅうけん な けいどう てんせ
是レヲ攷シテ鑄建ス、其ノ功既ニ就ル、惠同ハ天施ニシテ、一都ノ衆庶、失時ノ莫キ
う ここ けっせき ちょう
ヲ獲ル、茲ニ厥績ヲ録シ、之レヲ萬紀ニ徵ス。

町のおき奉行が、慈しむ町民のために時報の鐘を造ろうというよい考えを立て、その先人の企てを、よく引き継いで皆で同意して助け合い、事を計ってめでたく鐘を造るべく金木ともいえる真心を尽くして鐘を鑄るよう努力する。その甲斐あって既に願ひが成就する。その恵みは等しく天からの施しである。町中の誰もが、時を失うことなく時刻を知ることができた。ここに、その功績を刻んでそれを万代に伝えるべく記す。

それが、今も大仏の手前、左手の鐘楼に下がる、当時の時報の鐘である。当時、この鐘は町会所(現在の二番町の大泉寺前)のところに鐘樓があって時報の鐘として時を報せていたのである。

高岡湯話でも、修三堂に集まった面々が、茶話の中で高岡の善行のある人々を文章や筆跡の上手下手を頓着せずに皆で書いてみようと話こんでいた時に、「ハア今鳴る時鐘はいくつだろう。さてもはや暁の七つ(四時)なり、九つ八つはいつの間にか。うかうかと聞き逃してしもうたことだ。時のたつのは早いもんだと。皆、我が家へと立ち帰らんとする

。」とある。こうして、当時、町民が時刻を知る貴重な時報であったということである。

それが明治12年の大火で鐘台が焼かれ、その後、関野神社の境内に鐘樓を新設して時報としていたが、それも明治33年の大火で焼かれ、以来、商工奨励館に置かれていたものを大仏寺に寄付し、今は、大仏寺の鐘樓堂に下がっているというわけである。

かつて、平成5年に、市の中央図書館が「高岡市史料集」の第一集で、「時鐘銘（判）の解説を掲載したが、この古文書は、文化元年に鑄造された時鐘銘について、富田徳風が批評したものであるらしい、とされている。しかし、この文書にいう「時鐘銘」を含めて時鐘のことは、坂下町の鍋屋仁左衛門が、鐘の音が嘶くようであったことから壊してしまったという、その鐘のことである。だから銘についても、「此の字一方聞こえれば一方聞こえず」とある。また、銘の撰文は、「詩話」に、はじめ中島半助がつくったが、文章に締まりがなく、長いことからその体を失うものであった、とある。

因みに、大仏寺に係わっているならば、

高岡詩話によれば、弘化初年（1844）に、上田玄斎が大仏の後ろに講堂を築いた。それが桑畑の中にあることから「桑亭」と呼んだという。一時、盛んであったが、嘉永年間になって、遂に廃止されたと書いている。北溪は、このことについて、これ自体は、直接に詩歌に関わることではないが、町の文化の盛衰を観るに足る事柄といえよう。と付け加えている。今日、駅前での生涯学習センター、中央図書館の開館ということも、北溪のいう如く、市の文化の盛衰を推し量るに足るものの一つであるということである。勿論、それを生かすか、どうかは、そこに住む市民の活動の如何ということになる。文化とは、人がつくるものである。例えば、立山が、どんなに美しくとも、それ自体は自然そのものであって、その立山の文化を生み出すのは人である。

（2）養老軒のこと

高岡湯話に、貞節な女性、おきみのことが記されている。白銀後町に住んでいて、夫に先立たれて幼い男の子を抱えて女の細腕で手内職の機を織って、その僅かの手間賃で暮らしていた。その貧しい暮らしぶりを見かねて、ある男が、隣に住む婆さんを通じてお金を恵んでくれたが、おきみは、それを受け取らなかった。それには、真心こめて恵んでくださるのかも知れないが、私は未だ若い身であり、つい越えてはならないものを求めることにもなりかねない。とって固く断り、自らの節操を曲げず仲々の貞女であった。

ところが、その年の夏、お米が高騰して、加えて疫病がはやり、益々生活が困窮する世相となった。世間では、手内職の機や内職二預かっている糸を質に入れたり、勝手に売ったりしてお米や薬代に代えていた。それでも、おきみさんは、そんなことをしなかった。隣の婆さんが、その困窮ぶりと子供が患っているの見かねて、あんたも質に入れて米や薬を手に入れなさいと促したが、自若として動かなかった。

かくして二、三日して家の戸口が開いていないので、近所の人が不思議に思って様子を見ると、幼い子は、既に死んでおり、その子を傍らに寝かせて、自分は機の下に行儀よく

坐り、うつむき眠る如くに死んでいた。

世に稀なる貞節を守る女、讃えて余りあり、感嘆の尽くしようがない。今、ここに認める筆さえ、涙が取り留めようもなくこぼれて仕方がない。この時、寺崎莊河が、銀街の養老軒の前に、おきみさんの「墮涙の碑」を建てようと企てた、とある。

「墮涙」とは、涙をこぼすということで、中国の湖北省のゲン山というところに、晋の羊祜の碑がある。彼の死後、人々が、彼の徳を慕い、碑を建てて涙を流したという故事によるものである。

この「墮涙の碑」は、当時、実現されなかったが、その後、建立され、今も白銀町の一角に、ひっそりと建っている。

「養老軒」というのが、出てくるが、当時、白銀街に養老軒があって、文人たちがよく集う場所であった。高岡詩話の方に「養老軒」で詠んだ漢詩が残されている。

詩歌をつくる同人が、和やかに憩い休むところに、博労町に「臨江亭」、谷内に「養老軒」またの名を浄光庵ともいった。坂下町に「是性庵」また、春宵庵ともいった。

寺崎甥洲が、養老軒の詩に、次のようにいっている。

雖在通衢裏 後園緑野深 何 借蓑笠 山村遠幽尋
つうく こうえん りょくや すべから むのかさ ゆうじん
通衢ノ裏ニ在ルト雖モ、後園ノ緑野深シ、何ソゾ須ク蓑笠ヲ借リテ、山村ガ遠ク幽尋ス
別れ道の裏の通りがあると雖も、後ろの畑に緑の野が遠く広がり、山村が、如何にもすっきり蓑笠を借りたように遠く静かに繋がり連なっている。

「養老軒」の詩に「通衢」とあるから、恐らく道が交差していたからであろう。

・同じく、桑山石蘭が、「夏日」の養老軒を詠んでいる。

風清雲起宝池頭 夏景無塵品物齒 遊賞披禁忘俗累 滿林緑葉氣如秋
かしら むじん しなものし ゆうしょう ぞくゐ きんぼう ひら
宝池ノ頭ニ風清ク雲ヲ起シ、夏ノ景ガ無塵ニシテ品物齒タリ、遊賞シテ俗累ノ禁忘ヲ披キ、林ニ緑葉ガ満チ秋氣ノ如シ。

宝池のほとりに風が清々しく雲を起し、夏の景色は汚れもなく万物が齒並びのように整然と連なり、遊びを愛でて楽しむ者は、〔白居易がいったように〕昔を思い、今を喜ぶという俗事のわずらいを忘れてはならない。周りの林には緑葉が満ち、気配は、既に秋のようである。

勉強一筋ということだけでなく、時には、遊びを通じて人の心を知り、一木一草に乾坤、天地を知ること大事だということである。

〔白居易が、往ヲ思イ今ヲ喜ブノ詩に、「簪裾ニ在ルト雖モ俗累ニ従ウ」例え衣冠束帯をつけていたとしても、俗事のわずらいを忘れるなど詠んでいる。〕

白居易は、中国の詩人で、その詩は流麗で平易なことから広く愛誦され、わが国でも平安時代の文学に大きな影響を与えた。「長恨歌」が有名である。

寺崎甥洲の社中の攘斎が賦に養老軒を詠む。

養老軒前流水長 煙籠楊柳籠詩腸 紙田耕倦日方暮 代燭幽螢遶小廂

養老軒ノ前りゅうすいニ流水長シ、煙ガ楊柳ようりゅうニ籠こもリ詩腸しちょうニ籠こもル、紙田しでんヲ耕こうシ日方まさニ暮うレテ倦ム、燭しょく
二代ゆうけいリテ幽螢しゅうしょうめぐガ小廂しょうヲ遶めぐル。

養老軒の前の用水が遠く連なって流れている。〔今日の庄方用水〕川並に沿った柳にかかる靄が、籠もってぼんやりと霞んで、それが詩心にまで及んで心をもぼんやりとさせる。詩を綴り、紙に書く字も日暮れとともに草臥れを覚える。養老軒の小屋根の軒のあたりに灯火の代わりに螢火が静かにめぐっている。

この養老軒も老朽化したために、文化八年に壊されることになる。この時に、町役人の大橋作之進が、養老軒の古材で高の宮の前に桑山玉川（梅染屋武兵衛次）を責任者に据えて講堂を造り、敬業社と名付け、町中の年少者たちを対象に儒教の講義を受講させた。今の飯野屋仁右衛門の宅が、その跡である、と記している。

4. 詩文による歴史的な心の風景

このように、読み下してくると、単に、詩文を訳するというより、これらの詩文を通じて、当時の高岡の風景が心の風景としてを通じて伝わってくるという思いがする。

例えば、当時の瑞龍寺を訪ねて詠んだ詩を一例にあげると、次のように詠んでいる。これは、寺崎莊河（大撲ともいったが）の詠んだ詩である。莊河のことは、高岡湯話の「おきみ」の墮涙の碑文のことでもでてくるが、寺崎塙洲の父でもある。

夏日城南古梵臺 同調詞客倚崔嵬 共携書帙多幽趣 競把彩毫見賦才
楚地風流争日月 越中景色絶塵埃 人間何厭炎天苦 自有清江麗檻廻
夏日ニ城南こぼんだいノ古梵臺ニ、同調ノ詞客ガ崔嵬さいがいニ倚ル、共ニ書帙しよちつヲ携エルガ幽趣ゆうしゅ多シ、競ッ
テ彩とらえリヲ把ルガ毫ごうモ賦才ふさいガ見エズ、楚地ノ風流ニ日月ヲ争イ、越中ノ景色塵埃ヲ絶ツ、
人間何いとゾ炎天ノ苦ヲ厭ウ、自ズト清流有リテ麗シク檻かんヲ廻ル。

夏の日、城の南の古寺を訪ねる。一緒に行った連れの詞人が、岩のごろごろした険しい岩の一角に凭れている。共に詩づくりのために書冊を携えてきたが、山水が静かな趣きを豊かに溜めている。競って彩りを把えてみるが、賦の才が思わしく働かない。目の前のお寺は中国の寺の風流に遜色なく、ここ越中の寺の景色も塵埃を絶つものである。人間、何ぞ、夏の日を炎天を苦々しく嫌うことがあろうか。自然の清らかな流れが、こんなに麗しく涼しげに回廊の外を廻り流れているではないか。

また、服部淳卿の詠んだ詩をあげてみましょう。

淳卿という人は、清水少連の子、清水とは、現在の御馬出町の清水薬局の先祖で、槇屋という屋号で呼ばれていた。その清水家から淳卿が服部家に養子に入るわけです。今も水見の布施の円山に万葉の碑文が建っているが、当時、この淳卿が建てたものである。

序に、布施の円山の碑文について、享和二年（1802）に服部淳卿（叔信ともいう）が建て、撰文を作ったのが山本中郎（有香ともいう）で、題字の書は花山藤公、（題字は、「大伴家持卿遊覧之地」とあり、花山藤公とは、正二位権大納言である。）、撰文の書

は内藤元鑑であるとしている。

山本中郎〔封山〕が圓山の碑文にいう。

「万葉集中、湖ノ勝景ヲ賞スルヲ函ム、而シテ今見ル所、方一里許リ、浅狭ナルコト言フ所ヲ称エズ。蓋シ陵谷ノ変遷、今古ト其ノ形勢ヲ異ニスル者、在ル所頗ル多シ、此ノ湖ノ開塞モ亦、未ダ知ルベカラズ。然レドモ、其ノ変遷ヲ称エル所、猶、天然ニ属ス。」

とある。津島北溪の英遠紀行よりとる。

淳卿の詩は、高岡ではありませんが、能登の酒井の永光寺を訪ねた詩を詠んでいます。

幾踏白雲尋梵宮 藤蘿路暗水淙淙 爰僮驚殺魂將絶 虎様怪岩龍様松
いくとう ほんぐう ふじら みち そうそう ここ わらわ きつこん
幾踏シテ白雲ノ梵宮ヲ尋ヌ、藤蘿ニシテ路暗ク水淙淙タリ、爰、將ニ絶ニシテ僮ヲ殺魂
シテ驚カス、虎様ノ怪岩、龍様ノ松。

遠い道を踏んで白雲の漂う中に山裾の奥に静まる古寺を尋ねる。分け入る先の路は暗く、樹木に蔓草が絡み、谷の水が淙々と流れている。ここに来て、童の度肝をそぐように驚かす。虎を思わせる怪しげな奇岩、龍を見るような松、將に絶景というべきものである。

こうした古寺を訪ねるといふこと、由緒ある古寺といふものは、周りの自然の表情を生かすことで、その古寺がもつ歴史の重みを伝えるものである。その意味でも、この詩は十分に心の風景を通してその意味を果たしているといふことである。訳する私の方も、自ずと風景を描きながら訳していけるといふものである。

また、詩によっては、中国の莊子の思想を踏まないと、その意味のとれない詩にも遭遇する。その一例をあげると、寺崎莊河の「梅雨」の詩である。

鬱鬱苑中草 愁霖又過旬 看來書逾暗 老去酒慈親
胡蝶花如睡 金錢色少貧 陶然締短夢 欲効漆園顰
うつうつ ながあめ じゅん いよいよ
鬱々ト苑ノ中ノ草、霖ヲ愁イテ又旬ヲ過ギ、書ヲ看來スルニ逾ニ暗シ、老ヲ去ッテ酒慈
ヲ親シム、胡蝶ガ花ニ睡ルガ如ク、金錢ノ色少シ貧シ、陶然ト短夢ヲ締メククリ、漆園
ニ顰ヲ効ウヲ欲ス。

「陶然ト短夢ヲ締メククリ、漆園ニ顰ヲ効ウヲ欲ス」ここでは、「漆園」の二文字を、莊子の別名ととる。莊子が、漆園の官吏であったことに由来する。

それには、莊子の「齊物論」に、莊子という人を夢多き人といひ、莊子（莊周）が夢に胡蝶となる故事がある。「幻想一如」ともいひ、夢と現実が一つとなって現実の悩みも夢のなかで解決するといふものである。この詩を作った莊河は、だから、短い夢を締めくくり、「漆園ノ顰ニ効ウヲ欲ス」とある。これには中国の春秋時代の「西施捧心」という故事があり、昔、西施という美人が胸を病み、手を胸にあてて顔を顰めて悩んでいる姿を見てとても美しかったので、あのようにすれば美人に見えるのだと、ある醜い女が自分を美しく見せようとして病気でもないのに真似をして眉をひそめて見せたといふ故事である。

〔莊・天運〕

この故事を踏まえて、つまり、漆園、莊子にあやかって、「顰ヲ効ウヲ欲ス」自分の醜いことを棚に上げて無理して、夢の中で解決するといふ中国の莊子の真似をしたくなると

いているのである。こうしたところは、莊子の思想を踏まえないと文意のとりようがないというものである。

故事に、これは一説に莊子の先輩の列子が説いたともいわれているが、それは周穆王しゅうのぼくおうの話で、「人生百年、昼夜おのおの分なり、われ昼は僕虜となり、苦はすなわち苦なり、夜は人君となり、その楽しみ比なし、何の怨むところあらんや」これは王様と奴隸の話で、周の国の尹という男は財産をふやすことばかり考えていた。その尹家の使用人は、朝早くから夜おそくまで休む間もなくこき使われていた。なかに一人の老僕がいて、身体がもうということがきかなかった。それなのにおかまいなく使われた。昼間の疲れで夜は疲れ切つてぐっする寝込んでしまう。でも、眠れば心はのびのびとする。老僕は夜ごとの夢で王様になってすべてが思いのままである。それこそこき使われる主人をこき使い、すべてが思いのままである。この上ない楽しさである。そして目が覚めればもとの老僕にかえるのである。さぞ辛かろうと同情する者がいた。ところが、下僕がいうには、「人生百年のうち、昼と夜とが半分ずつ、昼は下僕として辛い仕事をさせられています。でも夜は王様で、この上もない楽しさです。別に不満はございません。」

一方、主人の方は、金もうけに身も心もすりへらし、疲れきって床につく。夜ごとの夢には下僕となって、走り使いから立ち働きまでさせられ、何かにつけて叱られたりなぐられたり、明け方までうなされどおしであった。

この故事を踏まえて、つまり、莊子は、人生の現実を夢と見て、このように見れば、人生は苦もなく、煩悶もなく、過ごせるというわけである。それが莊子の「夢に胡蝶となる」思想である。

この莊子のもののかつて、中学校の校長時代に、「莊子物語」を通じて読んだものであるが、年とともに、それを思い出すのに時間がかかり、漸く思い出して「莊子物語」を読み直してみても、目の前の難問との繋がりができて、謎解きのヒントとなるのである。頭の片隅にインプットされていても、年とともに、それを取り出すのに時間がかかるこの頃である。その結果、この詩を次のように訳することになる。

「庭の草が鬱蒼と茂り気もふさぐような思いである。そこへ一層愁いをそそぐように、降りつづく長雨が十日も過ぎている。書齋にきて書物を読んでみるが、ますます気持ちが暗く沈む。老け込んだ思いを払うべく酒のよい味わいに親しむ。途端に、胡蝶が眠る如く花にとまり、酒に酔ってうっとりするうちに短い夢を締めくくり、自分の醜いことを棚に上げて無理をして中国の莊子の真似をしたくなる。」

つまり、莊子にあやかって「幻想一如」でもって、夢の中で、この鬱陶しい気持ちを払拭したいというわけである。

こんな時、勿論、謎が解けた喜びがあるが、その反面、この歳になって、かつて読んだことが、直ぐに思い出せない苛立ちも隠せないというのが本音でもある。

今回は、高岡詩話の内容に入って、当時の高岡の具体的な街の様子、風景、習俗などを中心に話すこととなります。

5. 煎茶のこと

八橋山通仙が文政九年（1826）に片原町の広乾寺（曹洞宗）に来て泊まっている。自ら高遊外の流れをくむ者だという。その際、付け人に高さ四、五尺の茶の籠を背負わせて、その中に煎茶の道具をいっぱい入れ込んでいたという。暫く高岡に逗留して歳を越して帰っていったとある。また、田代琴岳〔棚田屋甚右衛門と称す〕が、風流を好み、商人の職にあるが、常に商人特有の計算高さなど微塵もない人物であった。その琴岳に「売茶庵」の詩稿数巻があったと記している。さらに天保十二年の一月七日の人日の七草粥の日に、田代琴岳、河原柳亭、津島北溪、土肥知言などの面々が「売茶庵」にて連句の詩を詠むとある。

これらの記述から、文政の頃、京都の売茶翁こと、高遊外の煎茶の影響が及んでいたことが分かる。売茶翁こと、高遊外は黄檗宗の禅僧であったが、自ら茶の煎法に工夫を加え、市井の隠者として京都の郊外に茶店を開き、往来の客に茶を売っていた。それはお金儲けのための売茶ではなく、彼がいうように「茶銭は、半銭まではくれ次第、自由勝手、ただ飲みも結構、ただし、ただよりまけはいたしません」このように茶道具を入れた籠を背負って、気儘に庶民の中に入って主もなく賓もなく、誰彼の区別もなく気楽に茶を楽しんだ。この売茶翁の売茶には、当時、抹茶の世界が腐敗と墮落の様相を示し、殊にその茶事をこととする禅僧社会に対する激しい批判の立場から取られたものである。それには当時の禅僧たちが茶事を通じて「賢しらの心」、つまり如何にも賢そうに振る舞うという似非禅僧の欺瞞を批判し、自由気儘に庶民と向き合う煎茶によって禅が真の姿に還えるための方便としたのである。

このことに上田秋成が、「点するは賢しらたり、煎するは聖たり」と称賛し、煎茶を支援した。こうした共鳴は、村瀬栲亭、頼山陽など文学者仲間に及んだ。その影響が当時高岡にも及んでいたということである。

別資料

正徳元年の服部南郭が、自ら認めた「親類書」に、自分の名の上に、「本国越中・生国山城」とある。これによると、家は越中高岡の出であるが、自分の生まれは山城（京都）であるというわけである。高岡詩話に、南郭が襤褸にした親に挈して京師に上ると、津島北溪が記しているが、各資料から推して京都で生まれたことは間違いのないようである。

ただ、父の元矩は29歳まで高岡に住んでいたようである。